
真紅の館の姫君（S）

KAHORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の館の姫君（S）

【Nコード】

N0187Y

【作者名】

KAHORI

【あらすじ】

地の底にある魔法王国の貴族の娘であるヴィアーナは兄しか知らない十八の娘。近頃兄の様子がおかしくて…。（ムーンライトノベルズで発表している同タイトルの作品のR15版です）。

真紅の兄と妹

高い高い塀の中、ヴィアーナは今日もじょうろを手に、庭で真紅の薔薇の世話をしていた。この庭には赤い花しか存在しない。赤はこの家を象徴する色だからだ。

今年で十八になるヴィアーナの肌はこの上無く白く滑らか、髪は純度の高い紅玉^{ルビー}が彼女の頭から溶けて流れたような煌く真紅、優美な眉も、睫毛も、ふくよかな唇も赤なら、瞳もまた深い真紅だった。着ているドレスも血のように赤い。

ヴィアーナはふと空を見上げる。空は紫色を帯びた黄昏の色を呈していた。地底にあるこの国——神話の時代に活躍した、魔力甚大なる紫眼の竜の子孫である魔王が治めるヴァール・ドゥナ・ガーシユは、もともと光の射さぬ空間なのだが、城の有能な宮廷魔術師が魔法で刻々と色を変じて民の目を楽しませてくれているらしい。光源は見当たらずと言いつのに明度を変える不思議な空には時に雲が流れ、星が出る。

兄はまだ帰らないのだろうか。ヴィアーナは溜息を吐きながら、空に、大いなる真紅の鷹の幻影を見る。

ヴィアーナには年が五つばかり離れた兄がいた。この屋敷、ヴァール・ドゥナ・ガーシユきつての貴族であるヴァリドゥー家の当主ハディール。彼は真紅の鷹に姿を変じ、強大な魔力をもって地上に住む魔力を持たぬ下等な生き物である人間どもを脅かし、日々、ヴィアーナ達の住む地底世界の存在を知らしめている。ハディールの不興を買った人間の町は一瞬の内に灰燼に帰した。ヴィアーナは兄ほど美しく素晴らしい青年を知らない。

（お兄様、今日はどんなお土産を持ってきたさるのかしら）

ヴィアーナが手を止めていた水やりをまた始めようとしたその時、視界の隅に小さな影を確認し、再び空を見上げた。兄だ。

「お兄様！」

じょうろを赤煉瓦の花壇に置き、ヴィアーナは両手を広げて兄——飛来する真紅の鷹の方へ駆け寄る。鷹の大きさは、広げた翼の端から端までが手を広げたヴィアーナの倍はある。鷹は薔薇を散らさぬ様にか、いったん塀の上に止まり、せわしく羽ばたきながら翼を収めた。

「お帰りなさい、ハデイルお兄様——今日は人間の町を幾つ消されたのかしら——聞くまでもないわね」

鷹は次の瞬間、金や黒の刺繍で装飾された真紅の衣を纏った丈高い青年の姿に変じた。塀に佇んだままの体勢で、すんと庭先に降りると、ヴィアーナは彼に抱きついた。少々癖のある、燃えるような赤い髪、秀麗な眉の下の鷹のように鋭い瞳。無愛想で滅多に微笑む事の無い唇。ヴィアーナは兄の全てが好きだった。

「ヴィアーナ。いい子にしていたか？」

「ええ、それはもう。いつものお兄様のヴィアーナよ。ところでお土産は？」

「こいつめ」

ハディールは微かに笑いながら妹の額を小突いた。ヴィアーナが軽やかな笑声を上げると、ハディールは懷から取り出しながら、妹に後ろを向くように促した。

「何かしら」

兄の手によりヴィアーナの首筋に掛けられた太めの銀の鎖の、白い胸元の中央にぶらさがる精緻な彫刻が施された小さな銀の板には、煌く紅玉が大小五つほど嵌め込まれていた。その見事さにヴィアーナは目を瞠る。うなじの髪を除けられ、金具を留められた。

「なんて綺麗」

紅玉はヴァリドゥー家を象徴する石である。ゆえにヴィアーナはいくつも所有していたが、これほど見事な石は持っていない。

「この世で最も紅玉が似合うのは我が妹をおいて他にはいまい。さあ見せてくれ」

催促されてヴィアーナは緊張しつつ伏し目がちに兄の方を振り向く。どうか、お兄様の期待を裏切りませんように。

「——やはり。思った通りだ。それどころか、宝石の方が霞んでしまっ」

ハディールは鋭い瞳を和ませた。良かった。ほっとヴィアーナは心の中で胸を撫で下ろす。そして入れ替わるように、ヴィアーナの胸は弾んだ。兄を独占する時間が訪れたのだ。さて、これから兄と何をしようか。チェスカ、お人形遊びか、それとも観劇に連れて行って貰おうか。兄は屋敷の外へ出る事をあまり許可してくれないけ

れども。

「お前は私のおきのお玉だ」

ヴィアーナがあれやこれや考えていたその時、ふいにハディールから指先でそつと顎を持ち上げられた。彼の真摯な瞳と目が合う。

「お兄様……」

ヴィアーナはこんな時の兄の瞳が苦手だった。どうして良いのか、分からない。正視が耐えられず、視線をあちらこちらに泳がせてしまう。息が苦しくなる。

「どうして、そんな瞳を……」

動揺しつつ問うと、兄は無言で顔を近づけて来た。

「あ……だ、め」

動けない。唇が、触れ合う。何だろう、どうして兄は最近、私にこんな事をするのだろう。

「あふ……」

兄の舌が入り込んで来ると、ヴィアーナは全身がかつと熱くなるのを感じた。今日の口付けは、何だか違う。危険だ。そう思うが抵抗出来ない。口の中を蹂躪されるうちに、痺れる様な心地良さと共にヴィアーナの奥処が妖しい反応を示し始めた。唇だけでは無く、更なる何かを求めているような反応。けれどその行為をヴィアーナはまだ知らない。友達が集まって、密やかな話をした際に耳にした

ばかりだ。

「んん……ん……っ」

堪らず、ヴィアーナは兄の衣を掴んだ。ハディールはまるでそんな妹の反応を面白がっているように、くずおれそうになる彼女の腰を支えつつ、執拗に舌を絡めた。甘やかに、弄ぶように。

「んんふう……っ」

もう、やめてやめてお兄様。心の中でヴィアーナは哀願する。

「——感じているのか？」

唇を離し、ハディールは妹の泣きそうな瞳を見つめて薄く笑んだ。

「お……兄様の……意地悪……」

「堪らない」

もう限界かも知れない、とハディールが物憂げに呟いたその時。

「ヴィアーナ、どうしたの？ さっき声がしたようだったけれど」

屋敷の奥から声がした。ヴィアーナ達の母の声だ。

「私です。ただいま帰りました母上」

ハディールは妹を抱いたまま何事も無かったかのような口調で屋敷の奥に声を掛ける。

「おお、お帰りハディール。ヴィアーナもそこにいるのでしょうか？
二人とも、中へ入って来なさい」

「だそうだ。歩けるか妹殿」

ハディールはからかうように妹の耳元に囁く。

「平気よ」

うなだれたヴィアーナは小さく返答した。

「今のは、お前をからかったただけだ」

「お兄様！？」

ヴィアーナの顔がさっと青ざめる。

「うぶだな」

くつくつと肩を揺らし、彼は笑った。兄は一体全体、私をどうしたいのだろう。

「済まなかった」

ハディールは宥めるように妹の肩を優しく叩き、やがて兄と妹は寄り添いながら屋敷の中へ入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0187y/>

真紅の館の姫君（S）

2011年10月29日14時55分発行